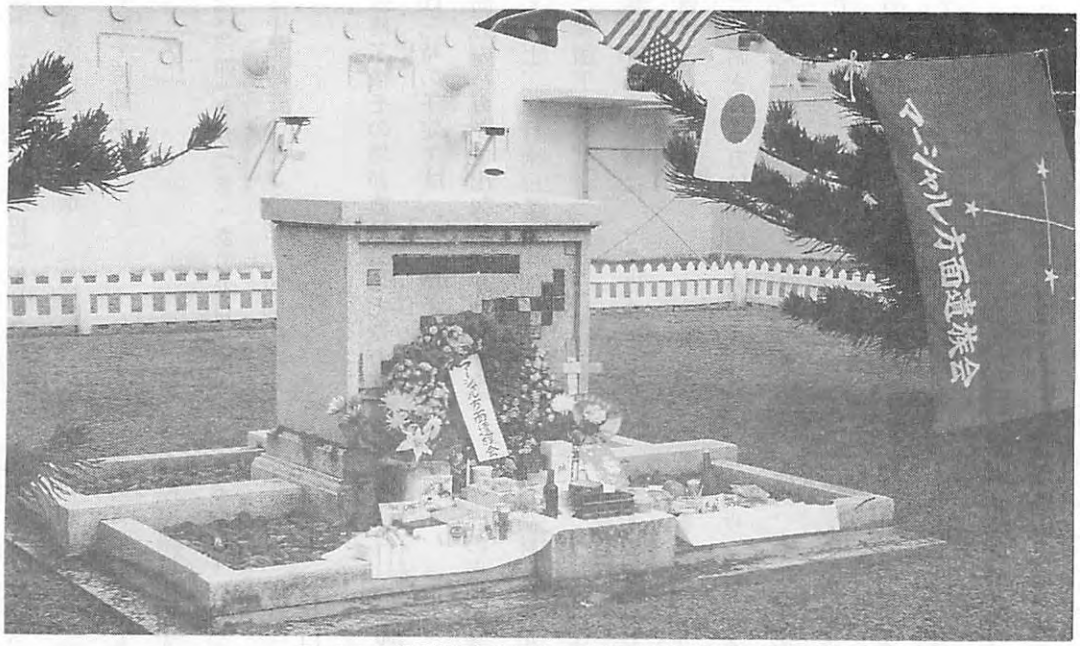
本部だより

●第3号

マーシャル方面遺族会



マーシャル方面遺族会クエゼリン主碑（平成12年10月17日撮影）

謹賀新年

平成十三年元旦

本部役員及び篤志会員

相談役	大給湛子（おぎゅうきよこ）	幹事
会　長	黒川　誠	同
副会長	畫間楽平	同
常任幹事	石谷典夫	同
同	荒木常子	篤志会員
同	高橋鎮夫	同
同	山村　要	
	高林芳夫	
	山口良二	
	佐竹エス	
	内海淑子	
	松平永芳	
	徳原徳子	

平成十三年度

慰霊祭・総会・直会のご案内

会長　黒川　誠

会員、会友の皆様には、お健やかに新年をお迎えのことと
お慶び申し上げます。

本年の慰霊祭・総会・直会を次の通り行いますので、皆様お誘い
合わせてご参加下さいますよう、お待ち申し上げております。

日時　平成十三年四月八日（日）午前九時
受付場所　靖国神社参集所前
慰霊祭　午前十時御本殿
定期総会
会場は、九段会館「あかつき・ありあけの間」に移動して十二時三十分より約一時間の予定です。
直会　総会終了後その場が直会会場となります。閉会は三時の予定です。
◇出欠は同封のハガキで出欠にかかわらず全欄にご記入の上、二月末日まで本部に到着するようにご投函下さい。
◇当日の参拝者の玉串料は、一名につき五百円で自己負担となります。
◇直会にご出席される方は同封のハガキにはっきりとご記入下さい。費用は一名につき四千五百円です。
◇本会へのご送金（寄付金・直会・玉串料）は、すべて郵便振替で二月末日までお願い致します。
◇お申し出のない限り領収証は発行致しませんのでご了承下さい。
◇当日の受付は混雑が予想されますので参加者のご確認だけに致します。
◇慰霊祭に出席する方で、九段会館に宿泊される会員・会友の方にお知らせ致します。

宿泊料一名一泊　九九七五円（朝・夕食付）
本部より宿泊の予定済みです。
九段会館・宿泊部　電話〇三・三二六一・五五二一
〒102-0074　東京都千代田区九段一・六・六

クエゼリン島・ルオット島　慰霊巡拝記

●黒川　誠（会長）

今回の現地慰霊は、本会主催で実施することが高林、佐竹担当役員の企画で進められました。旅行社は小田急トラベル株式会社に決めて希望者の募集から始まりました。

応募者は当初十七名でしたが、旅行費用がブラウン行を加えると予想以上に高額になるため、やむなく中止となり、最終的には十三名となりました。

■十月十四日（土）

午後二時、九段会館に集合して靖国神社参拝のあと畳間副会長より旅行中の安全と無事現地慰霊が出来るようにとの激励とねぎらいの言葉を受けて、成田ビューホテルに向かう。到着後結団式を行い、明日からの行事予定を田村添乗員から説明を受ける。

■十月十五日（日）

定刻通りフライト。成田発同日グアムに到着。グアム泊。

■十月十六日（月）

コンチネンタル航空でトラック、ポナペ、コスラエと島づたいに順調に飛行して主碑のあるクエゼリンには同日午後五時五十分（現地時間）に到着する。私と高林、佐竹の役員三名は、会を代表してマーシャル諸島共和国

マーシャル諸島共和国大統領カサイ・ノート閣下

カサイ・ノート大統領に表敬訪問するためにマジュロへ行く。

翌十七日早朝に大統領府に行き、表敬訪問の予定であったが、大統領が急用で当日の到着便でハワイへ行かれることになり、岳父山村要さんの案内で空港ＶＩＰホールで出発前の大統領と面談（写真右）することができた。

まず、大統領就任の祝辞を述べて、今回の慰霊巡拝の来意を告げたあとあらかじめ用意した「親書」（左記）を手渡して本会への今後の支援要請も加えた。

マーシャル諸島共和国
カサイ・ノート大統領閣下

大統領ご就任おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

私は、マーシャル方面遺族会会長の黒川誠でございます。

本会主催現地慰霊にクエゼリン島、ルオット島及び周辺の島々で戦没されたご英霊の遺族（会員）が十三名で墓参に参りました。

六月の島「サミット」で閣下が来日されたことを本会役員の山口良二氏から知らされましたが、閣下の多忙なスケジュールのため、お会いすることが出来なくて誠に残念でした。今回現地慰霊で貴地へ参りますので本会役員が代表して表敬訪問を致します。山村要さん（註・大統領は山村氏の女婿）は、本会の篤志会員を引き受けて下さいまして本会の慰霊碑建立をはじめ現地慰霊等数多くの行事には積極的にご尽力を賜り、大変お世話になっております。

なお、本会の精神でありますご英霊のみたまをお慰めすることが私達遺族の悲願でございます。これからも遺族会員がおまいりに参ります。どうかその折はあたたかいご高配を賜りますよう、お願い申し上げます。

今後とも閣下のご健康とご活躍をお祈り致します。

平成十二年十月十七日
マーシャル方面遺族会
会長　黒川　誠

■十月十七日（火）

ホテルよりマジュロ空港へ。山村さんの案内で途中日本大使館へ挨拶するためによりましたが、来意を告げても応答がないためやむを得ず、空港より電話で挨拶をと考えて直行。

前日まで雨天が続いてたが、空港へ着く頃には快晴となり、南国らしい青空が広がった。日本大使館に電話を入れ、応対に出た佐々木事務官に来意を告げて今後の支援を依頼して大使へ伝言を頼む。

午後一時にクエゼリンに戻り、主碑の墓前に集まって慰霊祭の準備を始める。強い日差しの中での作業中、カーチス・レイ基地司令官がわざわざお見え下さった。

早速入島許可のお礼を言上。今回の来意を告げるとともに今後の慰霊に対してご支援を要請する。

通訳は茂子さん。司令官は非常に好意的で、遠路の墓参をねぎらい、出来る限りの協力をするから遠慮なく申し出て下さいとありがたい言葉を賜った。

カーチス・レン・クエゼリン基地司令官

クエゼリン主碑の墓前で、私達は下記のような式次第で慰霊祭を行う。

時間も十分にあることから全員があらかじめ用意した追悼の言葉を肉親に呼びかけ語りかけて、精一杯のお参りをすることが出来ました。

私達の宿舎は基地のご好意で素敵なロッジを個室で使用することが出来ました。室内は冷房完備で快適にくつろぎました。

マーシャル・ギルバート諸島全戦没者追悼慰霊式次第

一、開式
二、会長挨拶
三、拝礼
四、国歌斉唱（全員）
五、黙祷
六、追悼の辞（全員）
七、海ゆかば、ふるさと（全員合唱）
　般若心経
八、拝礼
九、閉式

追悼のことば

マーシャル方面遺族会の主碑でありますクエゼリン島の墓前で私達遺族が集いお参りにまいりました。

先の大戦より半世紀以上にもなりますと戦

争を知らない世代が年々多くなっております。
戦争により幾多の同胞肉親を失った悲しみ苦しみはややもすると風化されようとしておりますが、私達遺族は永久に忘れることはなく、皆様方の尊いご意志を子々孫々に伝えます。
長い歳月の流れは私達会員も皆高齢になりました。体力の低下でお参りができない方も多くなりました。
もう少し近くであれば毎年でもお参りにまいりたいと存じますがクエゼリン、ルオット島は何分にも遠く、それも叶いません。
現在この島へ来て見ると南国の綺麗な空とあおい海にかこまれてヤシの木は大きく繁り、南方の植物は明るいじゅうたんを敷いたようにみどり一色に広がり、五十年前に激戦があったところとは信じられないような気が致します。
祖国防衛のため尊い生命を捧げてお護り下されましたご英霊のみなさま方ご神霊のご加護により今日の平和と繁栄を護られていることを私達は深く心にきざみ終生忘れることはありません。
私達遺族は、今後も体力といのちの続く限り靖国神社での慰霊祭を斉行し、現地慰霊を続けることをお誓い申し上げます。

平成十二年十月十七日
マーシャル方面遺族会会長
黒川　誠

■十月十八日（水）
ルオット島での慰霊に向かう。私は一九九八年弟と二人で来たときと同様に、ペンキ塗りも新しく、墓地はきれいに清掃されていました。
ルオット、クエゼリンの間は、小型飛行機で往復するため三時間という短い時間内で慰霊を行わなければなりません。
各自で持参した供物をあげて拝礼を行ったあと、泉水さんの先導で般若心経を全員で読経してご英霊の冥福を祈りました。
基地に滞在中、日系の茂子さん、山村さん、報道官のルアーン女史他、皆さんのあたたかいご支援を感きましたので、当初計画した行事が順調に進みました。
幸い、天候にも恵まれて短い日程でしたが、クエゼリン島、ルオット島両島の慰霊巡拝は滞りなく終わることが出来ました。

■十月十九日（木）
お世話になった関係者の皆さんに心からお礼申し上げて、クエゼリンをあとにし、一路グアムに飛び立ちました。
グアム到着後、ホテルの食事時間を利用して解団式を行い、お互いの労をねぎらい合いました。

■十月二十日（金）
グアムより帰国の途につきました。
全員が故障なく日程を過ごされ、元気でご帰宅されたことと拝察致します。
皆さん、本当にご苦労さまでした。

THE KWAJALEIN HOURGLASS

Volume 40, Number 84　　Friday, October 20, 2000

U.S. Army Kwajalein Atoll, Republic of the Marshall Islands

Negligent fires cost USAKA

Command seeks to recoup fire losses

By Jim Bennett
Editor

With three fires reported within the last five months, USAKA/KMR has announced it will now charge those found negligent in the cause of blazes.

Those found negligent in fire investigations could be held responsible for restitution, said John Wallace, RSE Site Manager. Where the fire is deemed an accident, residents will incur no charge.

Meanwhile, the USAKA/KMR Fire Department is looking to see what can be done.

"Fire prevention is our primary

See related story on National Fire

Bereaved

(Photo by Jim Bennett)

From left, Kimi Tomita and Matsuki Takako place flowers and other gifts at the Japanese Cemetery memorial on Kwajalein Tuesday. Tomita lost a brother during the battle in February 1944, and Takako lost a husband.

Japanese visit to honor war casualties

and
er
ta was just 42 years
d in the battle at Roi-
panese soldier left be-
-old son, Masakatsu

l, Fujita is too young
e war that took his
young, he said, "to
ce." Despite that, he

went to Roi Wednesday to pay his respects and pray for the father he did not know.

More than 8,000 Japanese troops died in the battle for Kwajalein and Roi-Namur in 1944. Fujita is one of 13 relatives who visited Kwajalein and Roi this week. They represent 600 family members of the Marshall Islands Bereaved Families Association.

Of the 13 visiting relatives, six lost their fathers, two lost husbands and five lost brothers.

The relatives, some in their 80s, have been coming to Kwaj and Roi since 1975 to pray for their fallen loved ones. They bring with them gifts of food, water and wine.

According to Japanese tradition, bringing gifts to the deceased helps them rest in peace, said Makoto Kurokawa, the chairman of the Bereaved Families Association. Kurokawa lost a brother on Roi.

(See BEREAVED, page 5)

(Photo by Jim Bennett)

ie memorial include
and wine. Japanese
bringing gifts to the
rest in peace.

Hourglass/hourglass.html

Friday
October 20, 2000　　*Kwajalein Hourglass*　　Page 5

Bereaved

Mourners remember war dead ...

(From page 1)

Like Fujita, Yoshio Takabayashi was also a small child when his father was killed in the battle of Kwajalein. This is Takabayashi's third trip to Kwajalein since 1975.

"It's because I want to see where my father lived and died, and where he is buried," Takabayashi said, through an interpreter. "I am fortunate my father is resting on this beautiful island. At this moment I am thankful that the cemetery is taken care of and it's clean and they (the deceased) can rest in peace."

The visit included ceremonies at both the Kwajalein and Roi-Namur Japanese cemeteries, along with a tour of battlefield sites.

Col. Curtis L. Wrenn, USAKA/KMR commander, welcomed the group before they began their ceremonies at the Japanese Cemetery Tuesday.

"I know it's very important for you to pay your respects," he told Kurokawa. "I consider it an honor to allow you to come."

Said Kurokawa later, "I'm very, very happy I was able to come. Especially meeting Col. Wrenn. I was very impressed because he said, 'Do not hesitate if we can do anything.'"

In a graveside speech Kurakawa vowed, "As long as we have energy and as long as we live we will pray to commemorate your death."

He said they would never forget that the peace they have today is because of the sacrifice made so long ago.

Masakatsu Fujita, son of a man killed on Kwajalein, bows in prayer during a memorial service Tuesday on Kwajalein.

Yoshinobu Kikuchi lights a candle for his brother.

Matsuki Takako, Ryoichi Shimizu and Makoto Kurokawa pray for lost loved ones on Roi Wednesday.

◆写真説明

（1面の写真）

上●慰霊碑に花と供物を捧げる冨田キミさん（左）と松木孝子さん。

下●慰霊碑に捧げられた供物。

（5面の写真）

上●火曜日クエゼリンでは慰霊碑の前で祈りが捧げられた。

下●菊池彦亘さんは兄弟のためにろうそくを燈した（左）。

下●祈りを捧げる松木さんと清水良一さん、黒川会長（右）。火曜日。

●クエゼリン島の現地新聞に掲載された本会慰霊団

〈新聞見出し〉

日本人グループ戦没者慰霊のための来島

（一面）

藤田正さんはルオット・ナムル戦闘で戦死したときちょうど四十二歳だった。日本の兵士は一歳の息子を残した。藤田正勝さんで、現在五十七歳である。藤田さんは語る。「父の顔は覚えていません」にもかかわらず彼はこの水曜日にルオットに渡り、彼の知らない父への敬意を表し、祈りを捧げた。

八千名以上の日本軍将兵が一九四四年クエゼリンとルオット・ナムルの戦闘で戦死した。藤田さんは今週クエゼリンとルオットを訪れた。十三名の遺族の一人である。皆は、マーシャル、ギルバート方面遺族会の代表である。

十三名のうち六名は父親を、二人はご主人を、五名はご兄弟を失っている。

この会の会員は、一九七五年以来、幾度となく愛する家族の墓参にクエゼリン、ルオットを訪れている。一行は、供物、水、お酒を持って来た。黒川誠マーシャル方面遺族会会長は、「お供えは、故人が安らかに眠られますようにという日本の習慣からです」と言う。会長は、藤田さんと同じルオットでご兄弟を亡くされている。

（五面）

高林芳夫さんは、一九七五年以来今回が3度目の来島である。クエゼリンで父親を亡くしている。「父がどんな所で生活をし、どのように死んだのか、どこに葬られているのかを確かめるために来ています。父がこんなにきれいな島で眠っているなんて幸せです。墓地はきれいに清掃されているのを見ると、感謝の気持ちでいっぱいです」と語る。

今回の訪問では、クエゼリンとルオットの両日本人墓地でセレモニーを行った。USAKA／KMRの司令官カーチス・L・レン大佐は、火曜日に日本人墓地で行われた慰霊のセレモニーの前に彼らを歓迎した。司令官は「遺族の皆様がここで慰霊をされたい気持が痛いほどよく分かります。皆さんをお迎えできて光栄です」と述べると、「墓参の許可を戴いて大変感謝しております。特に司令官にお会いできたこと、そしてできることがあれば何でも遠慮なく言って欲しいとおっしゃった言葉に感激致しました」と黒川会長から挨拶があった。

黒川会長は墓前にて「生きている限り、そして体力の続く限りお参りに来ます」と誓われ、「今日の平和は戦争により尊い命を失われた皆様のお陰であることを決して忘れません」という感動的な言葉で結ばれました。

取材●グエン・コプランド記者
和訳●山口良二

●現地慰霊に参加して

冨田キミ（福島県）

楽園に眠る英霊

私は二〇〇〇年最後の現地慰霊に行くことが出来ました。マーシャル方面遺族会の会長様始め皆様のご協力によるものと感謝致しております。

十月十四日成田のホテルで団結式を行いまして、十五日成田を出発してグアムに一泊。十六日朝早くクエゼリンに向かって旅立ちました。十七日午後からクエゼリンの慰霊祭に初めて参加することが出来ました。

クエゼリンの墓地は一面の芝生に白い柵を巡らして赤い鳥居に日本人墓地と記されており、当遺族会が造って送ったという慰霊碑が建てられ、きれいに手入れがしてありました。遺族の方々が持参された供物を供え、参加者全員で君が代、海ゆかば、ふるさとを合唱して団員で僧籍にある泉水堯恵さんの読経に合わせて般若心経を唱え、心からの冥福をお祈りしました。

私の兄は、ブラウン島で昭和十九年二月二十四日に玉砕致しましたが、ブラウン島には行くことが出来ませんでしたので、南の島々に行って手を合わせれば兄に通じるものと信じてクエゼリンの墓碑の前に立ちました。

会長様始め皆様のご協力によるものと感謝致しております。

「兄さん福島から逢いに来ました」と声を出すのがやっとの思いでした。胸いっぱいに熱い涙が込み上げて来て言葉にならず、やはりこれが肉親なのだと感じました。

今回の訪問でクエゼリン、ルオットを一周して感じましたことは、旧日本軍の司令部、防空壕の跡が残されてありました所々崩れておりましたが強固に出来ておりましたので少しばかり驚きました。

今は両島共絵のようなきれいな島々で、エメラルドの海、輝く太陽、波しぶき、夜は満天の星空、椰子の木立、正にこの世の楽園という印象でした。また、現地在住の日系の方方の温かいおもてなしを受けまして、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

●現地慰霊に参加して

佐藤知子（埼玉県）

慰霊再び

こんなに早く弟と揃って慰霊が出来る幸せ。初めて父の眠る島を訪ねたのは、平成十年のことだった。

そこでマーシャル方面遺族会との出会いがあり碑が建つまでの話も聞くことが出来た。

そしてこのたび二度目の慰霊の旅。それも父が出征して半日後に生まれた忘れ形見。

母がなくなるまで不憫を背負って育てた息子と共に。その母も平成九年七月黄泉の国へと旅立った。

「銃後をしっかり守ってくれ」の母への手紙。それに応えるような母だった。

当時シンガポール勤務だった弟から「親父の戦死した島に行ってみない？どこかで調べ

てみてよ」の一言から永年の夢が現実となったのである。

碑に向かうとこみ上げるものを抑えることは出来ない。

何分にも米軍基地内のことである。行けるときに何度でも足を運びたい。

そこが死に場所でなかったとしても今は父に一番近いところと理解して。

なごやかな旅も皆さんとご一緒出来たからと感謝の気持ちでいっぱい。

●現地慰霊に参加して

泉水堯恵（千葉県）

戦後に終止符が打てた墓参の旅

このたびは大変にお世話になりました。お陰さまで五十七年間の胸のつかえがおりました。引きずってきた戦後に自分ながら終止符が打てた様に思います。

竜宮城の如きのクエゼリンの海に眠っている父との対面で、同じ三百万人の戦死者の中では最高位に値する供養を受けていると思いました。

米軍の手で手厚く管理されているのを目の当たりに見せてもらい、感謝の気持ちをどう表現したらよいのか分かりません。

これまで何も知らずに過ごしてしまった自分の思慮のなさに深く恥じ入っております。

●現地慰霊に参加して

菊地彦旦（栃木県）

二度目の慰霊巡拝

クエゼリン・ルオットの現地慰霊墓参の折りはお世話になりました。感謝申し上げます。

戦後五十年を経過致しましたが、軍の施設内であるため英霊の墓参もままならず、昭和五十三年はクエゼリン止まり、今回は平成六年についで二度目でした。

つたない写真ですが、お送り致します。また機会がありましたら、ご一緒したいと思っております。

ありがとうございました。来春会える日を楽しみにしております。

●現地慰霊に参加して

西森サツキ（神奈川市）

兄の遺言を守って

今回クエゼリン、ルオット慰霊巡拝ということで参加させて頂きました。

十月十四日午後二時、九段会館に集合、全員揃ったところで貸し切りバスに乗車、一旦靖国神社にて下車、参拝を済まし、成田のホテルに向かう。

十五日朝八時十分予定通りコンチネンタル航空でクエゼリンに向かう。

黒川会長、高林さん、佐竹さんの三名は、マジュロの大統領表敬訪問へ、私達十名はクエゼリンと別行動になりました。

クエゼリン空港に降りた処では日系の茂子さんやカヨちゃん達のあたたかい歓迎に接し、感無量の極みでした。

空港近くの宿舎に案内され、旅装を解きやっと落ち着きを取り戻す。十七日昼過ぎに会長さん達が無事任務を終えて合流。全員で墓

今も残る司令部跡

墓前に向かって「君が代」の斉唱。続いて「海ゆかば」「ふる里」と合唱、霊よ安らかなれと祈った次第でした。

慰霊行事の後、島内見物に案内して頂きました。日本の兵隊さんの残した井戸には今も水が溜まっていました。兵隊さん達のご苦労が偲ばれました。

戦後一本だけ生き残ったという椰子の木があったことを思い出して茂子さんに聞くと、一昨年枯れてしまったということでした。あの椰子の木だけが戦争の悲惨さを知っていたのにと残念に思いました。

十八日八時十分ルオットに向かう。四十分着。バスで墓地に向かう。直ちにお墓の掃除などクエゼリンと同様に墓前を整えて、同行の泉水さんに合わせて般若心経を唱えて終わりました。

思えば、五十六年前、二十二歳でこの島で散った兄。特に九人兄弟でたった一人男の子だった兄。その兄の戦死の公報が入ったとき、人前では気丈に振る舞ったものの、人に隠れて納屋で一人泣いていたという母も、兄が守ってくれたのでしょう、九十五歳の長寿を全うしました。

出征の前の晩、私を呼んで両親の事、家の事頼むよとの裏には、生きて帰れないかもの覚悟であったのでしょう。その期待通り兄の代わりとなって家を継いでおります。持って行った洗米をお墓の周りにまきながら、後の事は心配せずに安らかにと告げる。

クエゼリンもルオットも往事を偲ぶものはなく、司令室や塹壕が残るだけ。今は蒼い海と椰子の木に囲まれた緑美しい島。一面の白い砂浜、静かにお眠り下さいと別れを告げて帰りました。

今回で三回目の墓参ですが、今までに一番気持ちよく楽しい一週間の旅が出来た事に感謝を致しております。会長さんや団長さんの行き届いた心配り、同行の皆様方のご親切、本当にありがとうございました。日系の方達の思いやりは忘れる事は出来ません。感謝の気持ちでいっぱいです。帰路の飛行機の窓から参へと向かう。

私は今回で三回目ですが、何度来ても新たなる感激を抑える事は出来ませんでした。早速全員で掃除にかかり、花輪を飾ったり、内地から持参したお供物や国旗を掲げた。レン司令官も墓地まで来て下さって、優しい言葉を頂き、感動致しました。

ら見た海に浮かんで見えた虹の美しかった事、今なお走馬燈のように浮かんで見えた虹の美しかった事、今なお走馬燈のように浮かんで来ます。本当に思い出深い墓参となりました。心から御礼を申し上げます。

●現地慰霊に参加して

藤田正勝（新潟県）

今後も参加したい

このたび、機会に恵まれてクエゼリン、ルオット現地慰霊の旅に参加し、墓参りをして来ました。

雨期ということで小雨、曇り空のクエゼリン島に到着しました。三日目からはいつものような暑い日差しと青い空、青い海、椰子の木が沢山ある島でした。墓地は米軍関係者によって維持管理され、非常に綺麗になっていました。六年前に行った時と全く変わっていませんでした。

ただ変わったことは、墓地の両端にある木が大きくなったことです。もっと大きくなりますと、墓地も日陰部分が出来、若干涼しくなるのではないかと感じました。玉砕から五十六年が経過しました。子供の頃は、父のいない惨めさ、寂しさを味わいつつ育って来ました。父なき後、色々の苦労もありました。その境遇に負けることなく成長して来た私も、もう二年で六十歳になります。終戦から五十五年の歳月が過ぎて、色々のわだかまりも取れつつ、機会があればお参りしたいというのが現在の気持です。

今回マーシャル方面遺族会の方々と一緒に墓参をすることが出来ました。さらにレン米軍司令官、マリアン・レイン報道官、ルアン・ファンタジア報道官、グウエン・コープランド記者、茂子さん始め、米軍の協力により慰霊することが出来ました。

関係者にお礼申し上げると共に、今後もご協力をお願い申し上げます。また、山口佳代さん、田村完一さんにも色々とご厄介になり、お礼申し上げます。

遠い地で眠る戦没者の方々、安らかにお眠り下さい。機会があればまた、行きます。後三回はお参りしたいと思います。世界平和と我々の繁栄と健康を見守って下さい。

●現地慰霊について

今までに現地慰霊は厚生省主催と日本遺族会主催、本会主催、個人で行く場合の四つがあります。

厚生省、日本遺族会の場合は資格年齢等の制約があります。会主催の場合は費用の負担を軽くするためにクエゼリン、ルオット両島のみとなります。

しかしながら、私達会員（遺族）の中には上記両島以外の方もたくさんおられます。ブラウン、ウオッゼ、マロエラップ、ミレー、ギルバート等がありますから、厚生省、日本遺族会主催ですと制約付で行かれます。

なお、クエゼリン、ルオット島以外は基地外ですから難しい規制や許可は一切不要です。従って費用に支障のない方は誰でも行かれます。

その場合、旅行者のご紹介は本部まで申し出て下されば良心的で親切な旅行社をご紹介致しますので、詳細はご相談下さい。

●寄付者芳名（敬称略・順不同）

次の皆様は、慰霊奉賛のため浄財をご寄付下さいました。厚く御礼を申し上げます。今後共本会の存続のため、何分ご協賛賜りますよう、お願い申し上げます。

北海道・伊藤フジ　宮城県・平形いせこ　福島県・小野敏子　栃木県・高橋克麿　東京都・雫石ハツ　出口スエ　神奈川県・平松芳枝　新潟県・片桐さき　静岡県・土屋まさ　愛媛県・渡部守　福岡県・河村末義　熊本県・右山定　会友・篠崎英夫

（平成十二年五月一日から十二月末日まで）合計五万七千円でした。

なお、年会費として前納戴いた皆様には、今回その全額を寄付扱いとさせて戴く運びとなりました。次の方々ですが、大変ありがたく寄付金として処理させて戴きました。

青森県・小笠原一雄　宮城県・伊勢昭男　茨城県・藤原よし子　群馬県・珍田光子　埼玉県・野田雅子　東京都・菅谷喜代子・田中猛・安井文子・片岡良子　新潟県・高林セキ　石川県・高畠芙蓉　愛知県・山田あき　三重県・近沢あき　奈良県・奥田義寛　広島県・佐々木千鶴子　山口県・下村チエ子　高知県・小松千代美　福岡県・橋本マサエ　長崎県・川副克己　熊本県・植川二男　鹿児島県・出花利文　沖縄県・宮城幸子・久高友三

●会計経過報告

◇現地慰霊行事による出費

前文にありますように、今回は仕組みを変えての新しい遺族会としての出発の意味で、現地での慰霊行事として形を整え、また大統領への表敬訪問等で出費がございました。

●本部だよりについて

過日のアンケートはがき集計では大多数の皆様にはご賛同を戴いておりますが、一四三名の方には未だご連絡を頂戴しておりません。「本部だより」は、お一人諸経費を入れて五百円余かかります。今後の行事その他にかかる費用を考えますと、会費がなくなりました。今後は皆様よりのご寄付に期待せざると得ません。慰霊を続けて行くには今後それ相当の費用の維持も必要です。皆様のお志を何卒よろしくお願い申し上げます。

以上、ご報告申し上げます。

環礁・本部だより　第3号
発行日　平成十三年二月一日
発行人　黒川　誠
マーシャル方面遺族会
本部
〒142-0051　東京都品川区平塚3-4-17
電話・03-3783-8382
ＦＡＸ・03-3783-8384
振替　東京00100-0-93487